

郭 翼飛 提出 学位申請論文

『ビジネス日本語における複合動詞』 審査報告

論文の内容の要旨

本論文は、ビジネス日本語における複合動詞の使用状況について、中上級およびビジネス日本語教科書における扱いを検討するとともに多様なビジネス言語資料における使用実態を調査して考察したものである。

本論文は、序章、本論九章、終章から成る。

序章で本論文の目的を述べ、第一章「複合動詞とビジネス日本語教育」では先行研究を踏まえて複合動詞の語構成と分類（意味的複合動詞と統語的複合動詞）、意味関係、前項動詞と後項動詞の生産性について検討を加えた上で、日本のビジネスで求められるコミュニケーション能力の養成をめぐって日本・中国におけるビジネス日本語教育の状況を概観し、ビジネス日本語における複合動詞の習得の必要性を指摘している。

第二章「産業に関する書籍における複合動詞の使用状況—後項動詞を中心に—」は国立国語研究所の「現代書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を用いて「産業に関する書籍」で V1 + V2 型複合動詞の後項動詞 47 語による複合動詞延べ語数 1772 語、異なり語数 633 語を調査し、対象語数 10 以上の 21 語がほとんどを占めており、そのうち上位の「始める」「得る」「続ける」「過ぎる」「出す」「着る」「兼ねる」の 7 語から成る複合動詞が全体の約 8 割を占めると指摘する。これら使用頻度の高い

後項動詞から成る複合動詞の使用状況を具体的に検討し、造語力の高い「始める」の中でも圧倒的に多い「出始める」が植物・動物・抽象名詞と共起しやすいなど個々の複合動詞の共起語について指摘している。

第三章、第四章ではビジネスに従事する日本語学習者が利用する可能性の高い日本語教科書、ビジネス文書マニュアル本における複合動詞の実態を解明している。第三章「日本語教科書における複合動詞の使用状況」では中上級日本語教科書とビジネス日本語教科書において扱われる複合動詞の出現状況を比較して、日本語学習者が就職活動や仕事場面で使用する機会の多い補助動詞を考察している。その結果、「恐れ入る」「申し伝える」「かけ直す」「申し上げる」をはじめビジネス日本語会話教科書に頻出する複合動詞は中上級教科書にほとんど扱われていないことを指摘している。第四章「ビジネス文書における複合動詞の使用状況」は5冊のビジネス文書マニュアル本を調査資料としてビジネス文書における複合動詞を調査して、「申し上げる」が最も多用されること、また、「引き立て」「取り急ぎ」などビジネス文書に特有の語彙についても考察を加えている。また、ビジネス文書マニュアル本に「不動産」「貿易」「保険」など専門的なビジネス用語を扱っていないため実際のビジネス文書作成にあたっては専門分野に応じた語彙が使用される可能性を指摘している。

第五章、第六章、第七章では個別的な業界における複合動詞の使用状況の特徴を調査するために多様な資料を用いている。第五章「ウェブサイトにおける複合動詞の使用状況」は商社4社とコンビニ5社における複合動詞の実態を調査し、商社・コンビニに共通して「取り組む」「支

払う」「引き続く」「申し上げる」が上位 4 語を占めていると指摘する。業種の特徴を反映してコンビニのウェブサイトでは顧客との関係作りを重視して「出会う」が新商品開発や会社経営理念などの文書に多用されているなどの特質を明らかにしている。第六章「旅行業界における複合動詞の使用状況」は大手旅行会社が発行したパンフレットを資料として複合動詞の使用状況を調査することで「風景」「グルメ」「交通案内」に関する複合動詞の出現頻度を明らかにしている。ことに「風景」の分野では「織りなす」「見上げる」「浮かび上がる」「見渡す」「出会う」「立ち寄る」の 6 語、「グルメ」では「召し上がる」「取り入れる」「盛り込む」「仕上げる」の 4 語が上位を占めており、これら頻度の高い複合動詞は旅行業界への就職を目指す日本語学習者を対象とした日本語教育で重視すべき語彙であると指摘する。第七章「医療業界における複合動詞の使用状況—医療アプリを中心に—」は医療アプリ「ナースフル疾患別シリーズ」および「ナースフル国試対策」における過去 11 年分の問題を対象として複合動詞を調査して「繰り返す」「引き起こす」「取り除く」などの使用頻度が高く、医療現場に共通する語彙であり医療業界の特徴的な複合動詞として扱うことができるとしている。

第八章、第九章はビジネスの会話場面における複合動詞の実態を解明するためにビジネスドラマを資料として考察を加えている。第八章「ビジネス会話における複合動詞の使用状況—会社ドラマ『ハケンの品格』を中心に—」を資料として複合動詞を調査したところ、「売り切れる」「逃げ出す」「打ち切る」「落ち着く」が上位 4 語であり、第三章で考察

した事務・電話の場面が集中するビジネス日本語会話教科書で多用される複合動詞と必ずしも一致しない実態を明らかにしている。第九章「販売・営業における複合動詞の使用状況—ドラマ『家売るオンナ』を中心に—」は会社ドラマ『家売るオンナ』を対象として販売・営業に関する会話における複合動詞の特徴を指摘する。

終章においては、本論文で行った分析をまとめ、今後の課題を述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語学習者の学習困難点の一つである複合動詞について、従来ほとんど研究対象とされてこなかったビジネス場面における実態を解明するために、多様なビジネス言語資料を調査して、特に各業種に特化した現代の言語資料を対象として分野ごとに多用される複合動詞とその特質について解明した研究であり、高く評価することができる。

第一章では複合動詞の先行研究を体系的研究、意味的研究、言語習得研究に大別して検討を加え、本研究における複合動詞の定義、分類、統語的關係を示している。ただし、そもそもなぜ複合動詞だけにテーマを絞ったのか、単純動詞と複合動詞との関係についての言及に乏しく、また、先行研究を列挙しながら、本論文の各章における様々なビジネス言語資料における複合動詞の使用実態の分析に活かしきれていない恨みがある。第二章では、現代書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を用いて「産業に

関する書籍」における使用頻度の高い複合動詞の後項動詞7語を明らかにし、造語力の高い複合動詞の共起語を解明したのは、学習者にも有益な指摘であるが、考察に当たって複合動詞の意味記述の典拠についてはさらに慎重を期すことが望まれる。

第二章・第三章では中上級日本語教科書・ビジネス日本語教科書、ビジネス文書マニュアル本という日本語を用いたビジネスに従事する日本語学習者にとって使用する蓋然性の高い教材・自習書における複合動詞の扱い、使用状況を検討したもので、ビジネス日本語教育の視点としては至極妥当な資料分野の設定であり、両章によって確認された複合動詞の使用状況は、ビジネス日本語教育の基本的な情報として斯界に共有されるべき性格のものである。より精密な分析のためには、日本語教科書・ビジネス文書マニュアル本の選定基準について、漠然と多く使用されているからというだけでなくより客観的に明記すべきであろう。

第五章・第六章・第七章は、それぞれ具体的に日本語学習者がビジネスの現場で接する可能性の高い複合動詞の実態を解明するために、より具体的な個々の業界におけるビジネス言語資料を調査対象としている。第五章の商社・コンビニのウェブサイト、第六章の大手旅行会社の発行したパンフレット、第七章の医療アプリ、いずれも日本語学・日本語教育学にわたってほとんど未開拓の言語資料であり、本論文の真骨頂もここにあるといえる。これらの各章によって解明されたそれぞれに使用頻度の高い複合動詞の語彙群は、ビジネス日本語の習得を目指す幅広い学習者を対象とする教科書とは異なるより個別的な複合動詞の使用実態で

あり、極めて有益なデータとなっている。ウェブサイトの検索機能を用いた検討は複合動詞の調査語彙として先行研究の示す語彙を援用しているように想定外の語を見いだすことに制限があるのはやむを得ないところである。なお、第二章で複合動詞と名詞との共起を分析したのに対して、第五章で複合動詞と助詞との共起を考察しているが、その間の整合性について合理的な説明が望まれる。

第八章・第九章は現実のビジネス会話が企業秘密や個人情報の保護のため生のデータに接することが困難であるためそれに準ずる資料として、またビジネス会話のビデオ教材としての教材化の資料として有望なビジネスドラマを対象とした調査である点に意義があるが、現実のビジネスの現場の録音・録画ではないため、複合動詞の調査結果に見られる語彙の偏りが創作としての資料性に起因する可能性もあり、これもまた資料の性格上やむを得ない点であるといえよう。

なお、本論文では第一章の後半でビジネス日本語の定義、ビジネス日本語教育の日本・海外における実情、外国人留学生など日本語学習者の就職状況に言及しており、そのこと自体は本論文の意義付けのために重要な情報ではあるが、各章の冒頭にもしばしば同旨の記述が散見しており、やや読みづらい感が有り、いますこし工夫を加える必要があるようである。

本研究は以上の本論九章に亘る多彩な資料を駆使した考察によりビジネス日本語における複合動詞の実態を解明し、多様な業態のビジネスの現場を目指す日本語学習者のための効果的な複合動詞の習得に貢献する

研究として高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、郭翼飛は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成 30 年 12 月 17 日

主査	國學院大學教授	諸星美智直	㊟
副査	國學院大學教授	小田勝	㊟
副査	國學院大學大学院客員教授	カイザー・シュテファン	㊟

郭 翼飛 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成30年12月17日

学力確認担当者

主査 國學院大學教授 諸星美智直 ㊟

副査 國學院大學教授 小田 勝 ㊟

副査 國學院大學大学院客員教授 カイザー・シュテファン ㊟